



有松まちづくりの会役員会

8月24日に予定されていた役員会は、愛知県の緊急事態宣言等により中止となりました。

新型コロナウイルスに揺れるまち その後

7月に入っての感染拡大により、有松を訪れる観光客は例年の半分以下の印象です。そのようなまちの様子を紹介します。

協会館では、マスクを求める方が引き続き見られ、売り場面積・品数ともに増えていました。8月1日からは伝統工芸士による実演が中止されていました。軽妙なトークが聞かれず残念です。

観光客減少は飲食店でも大打撃です。コンソーシアム有松の呼びかけで、テイクアウトを進めようとして共通チラシが作られました。協会館始め各所に置かれています。是非ご利用ください。



市博物館で「浮世絵でみる有松絞店」展示再び始まる（7月18日～8月30日）

コロナの襲来で、2月26日からわずか3日で展示が休止された上記展示会が再び博物館で始まりました。絞店の宣伝チラシとして作られた浮世絵は、当かわら版でもその一部を山本文雄氏により紹介させていただきました。

（116号・117号・118号・122号）絵だけでなく、説明文にも力を入れて作られていることがお分かりいただけたと思います。

展示会では、宣伝チラシ以外にも猿猴庵や葛飾北斎が描いた絞店の浮世絵が展示されていました。右絵「東海道五十三次 四十一 鳴海」は名所絵というより美人画。絞り糸を口にくわえ作業する女性が描かれていました。



トークショー(8月22日) 主催:有松日本遺産推進協議会 浮世絵と写真で探る有松のウソ? ホント?

名古屋市博物館学芸員で浮世絵を専門とする津田卓子氏とアートディレクターで昨年1年に渡り有松を撮っていただいた岡崎リョウタ氏をお招きして行われました。旧山田薬局の主屋和室を会場に、参加者15名とスタッフ数名という少人数での会ということもあり、お二人の軽妙な話に引き込まれたあっという間の1時間半でした。

お二人に共通した話が、浮世絵にせよ写真にせよ画面の絵作り・構成を決めることはとても重要である、と。津田氏は有松絞という商品を強調するための演出として、また岡崎氏は浮世絵をヒントに縦長の画面では余分なモノがそぎ落とされ真実を捉えられるとお話されていました。



画面左:岡崎氏 右:津田氏



有松絞りで応対 碧海信用金庫有松支店（7月31日）

地元の方に少しでも明るい話題を提供したいと、碧海信用金庫有松支店では7月31日限定で、女性職員が有松絞りの浴衣で応対していました。

鈴木卓真支店長にお話を伺いました。「これまで絞りまつりで浴衣を着ることはありましたが、コロナ禍で中止。変わるものとして急遽計画しました。営業時間中では初めての試みです。地域の方には着付けをしていただくなど助けていただきました。」

職員の皆さんの想いは、受付横の手書きのボードに出ていました。来店客の反応も上々のようでした。



浴衣雪花ストリート（8月7日～23日）主催：NPO法人コンソーシアム有松

有松イオン2階通路を会場に、雪花絞りの浴衣や手拭い・反物の展示会が行われました。商業ビルの入口ということもあり、来店客が気軽に立ち寄っていました。板締め雪花絞りは柄・色や様々なデザインがあることから、今日ますます注目を集めています。平成21年に涼しげで華やかな印象の雪花絞りの浴衣がCMに登場し、以来需要が増えました。



《一口知識》雪花絞りには意外な過去が…

雪花絞りは明治に入って鈴木金藏氏により開発され、大正時代に(株)張正が製作を始めました。戦後、赤ちゃんの布おむつとして大量に生産されたり、短期間ですがいろいろな色で染めアフリカに輸出されたりもしました。しかし、紙おむつの普及などで生産は激減しました。

平成7年に(株)張正が雪花絞りの浴衣を製作しはじめ、モダンな絞り商品として消費者に受け入れられるようになりました。

アトリエ「彩 Aya Irodori」開店（8月7日）

写真下：右側が大須賀彩さん

ゲストハウスMADOの向かいにアトリエ「彩 Aya Irodori」がオープンしました。有松の町並みに合わせた店舗兼工房に入ると、そこには括り職人 大須賀彩さんのこだわりの空間が広がっていました。1階奥には体験できるスペースがあり、2階は販売スペースです。現代の感性を取り入れた製品がいっぱい…

Q1 絞りとの出会いは？

彩さん 学生の時有松絞りに出会い、その技法を勉強したいとsuzusanに弟子入り。8年間修業したのち2年間山上商店でも修業して2017年に独立しました。その後、縁あってここに店を持つことができました。

Q2 これからの目標は？

彩さん 有松に初めて来たとき「なぜ若い人がいないの？」「若者が欲しい商品がないの？」と思いました。また、修行中は若手職人の発表の場の少なさを感じていました。この工房を使っただけで、学生さんや若手の方と商品開発ができればと思っています。若い人に、有松にはすごい技術があることや魅力的な町であることを知って欲しいです。私個人としては、本物の技法を更に身につけたいです。昨年から絞工業組合（絞りLab）に習いに行っています。



知ってますか？ 山車まつりのこと

今年の天満社秋季大祭（山車まつり）は神事のみとなり、山車の曳行やからくり実演は中止となりました。この機会に、長く親しんできた山車まつりの歴史をひもといてみましょう。

1 戦前の山車まつり

有松天満社の秋祭りは、旧暦8月に行われていた有松から桶狭間の神明社へ参詣する行事を母体としています。桶狭間からも有松へ獅子や馬が来ていました。この相互参加は昭和初期まで続いていました。当初祭礼の出し物は傘鉾やオマントが主役でした。有松の祭礼にいつから山車が曳き出されたかははっきりしませんが、江戸後期には有松にも車輪が付いた祭車が出ていたことが分かっています。現在曳かれている3台の山車は明治に登場します。

また、昭和10年ころ鳴海の猩々をまねて天狗と猩々が作られました。今でも祭礼のときに厄年の人がこれを被り町内を練り歩きます。

祭礼の核を担う組織として、有力な絞り商の中から中老が選ばれていました。祭礼における諸般の指示を出し、祭礼の費用の大部分を負担しています。明治に入ると、絞り産業発展のため電信電話開設や道路改修・鉄道敷設にも取り組み、いわばまちづくりの組織でもありました。

（参考文献：有松町史、有松一伝統的建造物群保存対策調査報告書一、なごや歴史探検）



「尾張年中行事絵抄」より



天狗と猩々



投稿 有松スケッチ 番外編 湯地昭夫氏

《一口知識》

有松天満社の祭礼には、福神をかたどった猩々と天狗のお人形が2体登場します。人形の頭は張り子で麻の長髪、胴は竹籠状で赤い着物を着ています。人が中に入り、胸の覗き穴から見るので身長が2メートルを越します。

祭りでの役割は子ども達と祭りを盛り上げることのようにです。戦前生まれの人は、猩々や天狗にボワレタ（追いかけられた）思い出を語られます。手に持った大きなうちわで頭を叩かれると「病気にならない」「厄除けになる」と言われています。でも、今は優しく頭を撫でてくれ、追われることもないようです。また、祭礼行列に加わって歩くことも大切な役割です。

猩々は名古屋市緑区・南区・東海市・豊明市などで見られますが、なぜか天狗は有松にしか登場しません。

有松の紙芝居のはなし5 「戦争の時代～お灸と指輪～」

(文：浅野康子 絵：福岡友一)

浅野さんに作品への思いを語っていただきました。

4年程前、当時のあないびとの会の成田会長に「棚橋恭子さんから捕虜収容所と指輪の話聞いて朗読文にしてほしい」と言われました。捕虜収容所があったことは、会の勉強会で知っていたのですが、指輪のことは初めて聞く話でした。すぐに恭子様にお会いし、お父様のこと子供時代のことなど色々お伺いしました。また、木村康子さんという方も恭子様のお話の記録を作っておられましたので、参考にさせていただきました。

後日棚橋邸で行われた朗読会には、大勢の方が来てくださいました。その後、原稿を少し子供向けに手直しし紙芝居用に作り直しました。小学校高学年から中学生を対象にしました。戦争の事実を分かって欲しいという思いで、あえてタイトルに戦争の2文字を入れて「戦争の時代～お灸と指輪」としました。



地域活動 有松一里塚の清掃 (8月3日)

半年ぶりに一里塚の草刈りが行われました。この期間、地元の方が手入れをしてくださる姿を見ましたが、梅雨の時期で草も伸び放題となり、世話人的役割の鋤柄通雄さんの声かけで有松まちづくりの会会員数名で行われました。この暑さの中、参加された皆様ご苦労様でした。



HPの紹介 その6「有松山車まつり」

有松山車まつりは、市の無形民俗文化財に指定されており、毎年10月の第1日曜日に開催されています。有松東海道を山車3台が昼と夜曳き回され、お囃子が演奏される中、からくりや車切りが披露されます。このHPでは、前日夜の「献灯祭」から祭りの最後の「総納め」までの19行事ほとんどを動画で見ることができます。今年はコロナ禍で山車曳きは行われませんが、この動画でお楽しみください。

《「有松山車まつり」の呼び出し方》

「有松のまち」入力→検索→「有松のまち」の「有松の行事」→

「10月の有松山車まつり」→「見たい行事」→ 動画再生

催事・行事の予定

- 9月05日(土) 10:00 絞り半纏づくりワークショップ 久野染工場 ※
- 9月06日(日) 09:00 有松東海道青空市 商工会周り 青空市運営委員会
- 9月13日(日) 11:00 秋のオカリナライブ 松柏苑 有松町家ライブ
- 9月14日(月) 18:00 有松町並み相談会 コミセン
- 9月26日(土) 13:30 日本遺産ワークショップの開催 テレワークで実施
- 9月26日～10月04日 有松祭礼と絞り展 ※有松日本遺産連絡協議会
- 9月27日(日) 07:30 かえで道清掃 有松まちづくりの会
- 9月28日(月) 18:00 有松まちづくりの会役員会 コミセン



コロナ退散!

8月号訂正のお願い

寄稿「天下取りへの道 長坂道」の文中、「家忠日誌」→「家忠日記」に直してください。

発行者:竹田嘉兵衛(有松まちづくりの会 会長)

編集者:加藤 一成(有松まちづくりの会 広報部員)

T・F 052-623-1676 090-4163-2671

E-mail katoisse@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開してます。

有松のまち

検索

有松探訪

浮世絵にみる有松絞り店4

有松絞 山形屋庄五郎店先

有松あないびとの会 山本文雄

名古屋市博物館常設展テーマ10「浮世絵にみる有松絞り店」に展示された浮世絵を紹介します。

名古屋市博物館での展示が開始してすぐ中断され、はくぶつかん講座も中止されたため、「みてもらいたかった有松絞店展」としてフェイスブックで紹介され、この画像もアップされています。

「有松志ぼり」（有松絞技術保存振興会）によると、小塚家は寛文年間（1661～1673）に有松に移住し、山形屋として明治期まで有力な絞商でした。主屋は文久2年（1862）の建造で、その頃、小田切春江に原画を依頼したものと思われます。黒漆喰に卯建、虫籠窓の形状も変わっていませんが、明治期に表葺が建てられています。

暖簾には「御産物絞染所 山形屋庄五郎 新模様絞染品々 ねだん引なし」とあります。竹屋佐兵衛の店の絵（「かわら版」117号）には初めから描き込まれていた「浪花講」の看板が、右端の軒下書き加えられています。往来には、駕籠から降りて店に入った上級武士、荷物を担いだ従者を従えた旅姿の婦人の二人連れ、何を運んでいるのか2人の棒手振り、店に入り込んで商談する様子も描かれています。下に描かれている一対の燈籠は、この絵のとおり、東海道から天満社に向かう切通しの入口に今もあります。

左上の吹き出しには「世にもてはやす 有松絞といへるは、古へのくゝり染にして 其起原（おこり）を尋るに、大和国龍田法隆寺に伝はれる、孝謙天皇の御禊（しとね）を氈代（せんだい）纈纈染（ゆはたぞめ）といひて、則（すなわち）、くゝり染なる事は好古家のよく知る所也（なり）。賀茂真淵が著はしゝ初学（ういまなび）といへる書にも、纈纈は絹を糸もて 所々くゝりて紅紫緑などに染るなり、今いふ絞染に同じとしるせり。さるを此里に伝へて製し初しより、其名をちこちに聞へて東海第一の名産とはなれり。殊に此家は天満宮の鎮まります文章嶺に相對して、彼神木の梅ならねど、染る模様も年々に新奇を競ふ魁（さきがけ）なるべし。千歳園しるす」孝謙天皇の使用した敷物のことが書かれています。江戸時代檀家を持たない法隆寺などの古寺院が修理費などを捻出するため、度々、江戸や京で、出開帳として仏像に限らず珍しい伝世品を出品しました。その中にこれがあったため、知られていたのでしょうか。

現在の小塚家住宅



絞り探求4 ここは絞り機械博物館 久野染工場

説明 久野剛資氏

久野染工場には貴重な絞りの機械が展示されていることをご存じでしょうか。先日見学する機会がありましたので紹介します。(説明要約：伊藤総俊)

久野染工場 外観



Q1 蜘蛛絞りの機械を復元されたそうですね。

機械蜘蛛絞りという細かい柄があります。それを作る機械はもう生産されていなくて、故障したら終わりです。それで、自分で図面を起こして写真①の機械を作りました。復元したら仕事も生まれ、洋装にも絞りを取り入れるようになってきました。

このようなことをしたので、「鹿の子絞りの機械も久野さんのところへ」と渡され、社屋に展示してあります。大高の方で、絞りの歴史の上ではすごい方です。写真②の機械を10数台復元されたのですが、区画整理で置き場がなくなり持ってこられました。

Q2 他にも絞りの機械がいろいろありますね。

写真③はプリンターで、絵刷りをするものです。元来絞りの図案は型紙にポンチで穴を空け、生地を型紙に当て下絵を付けるのです。しかし、今は図案化すれば、この機械で生地に印刷をすることができるようになりました。

写真④は嵐絞りの機械です。元々は丸太に生地を巻いて、糸を掛けてつくるのですが、自社の工場では長さ1mのステンレスの棒にして、量産に対応できるようにしています。

Q3 日本遺産に認定され、絞りに注目が集まっていますね。

絞りはもともと素朴なもの。有松の先人たちは400年以上にわたり付加価値を付けることで高度な製品を作ってきました。とりわけ嵐絞りでは多くの特許が公開され、広がりを持つことができました。染屋の4代目として一層絞り産業を支えていきたいです。

《 ちょっと詳しく 》

絞りの開祖竹田庄九郎により有松にもたらされた絞り産業は、有松が知多木綿の産地に近く、また東海道に面していて人の往来が盛んということで、この地に根付きました。江戸時代尾張藩からの保護・育成もあり大いに発展しました。明治時代に入り独占の消滅により厳しい時代に入りましたが、多くの人々により多種多様な絞り技術が考案され更なる発展を示しました。

中でも鈴木金藏は嵐絞りや雪花絞りなど数多くの技法を生み出し、絞り中興の祖といわれています。その後も新たな技法が開発され、明治42年(1909)には福岡兼吉が機械蜘蛛絞り(①)を、大正元年(1912)には岡田松治郎が機械鹿の子絞り(②)をそれぞれ発明しています。これらの機械化を更に推し進めた物が久野染工場で展示・使用されています。(伊藤総俊)

註① 機械蜘蛛絞り：この発明で蜘蛛絞りが簡単かつ精巧に量産できるようになりました。

② 機械鹿の子絞り：鉤針に生地をかけてつまみその根元を小さく括るもの。小粒に絞り上げ細い糸で強く括ります。綿布では糸解きが難しく、容易な絹布で主に用いられます。

①



②



③



④



